

善惡色欲二道

全

913.5

七

5

樂亭西馬化

善惡道中
第五編

善惡色欲二道

秋川國輝画

頂恩堂取

善惡色欲二道序

道家どうじや子こ寓あや言ごんありあり佛家ぶつじやにに方便べんべんありあり其その家けにに

謀まう計けいもも市人いちじんのの懸直けんちくをを傀儡くわいぐい乃なり虚言きょごんもも其その終しゆうととる

虚きょははこれこれもも是これ皆みな家けをを齋さいへへ身みをを脩しゆはは空言くうごんのの言ごん

中ちゆうのの言ごんのの言ごん實まこと成せい生せいにに虚きょのの言ごんをを實まことをを形かたちにに

根ねのの遂すいぬぬ大星おほしほしががわわるる之この呪まじな入い言ごんのの文句ぶんくありあり愛あい

先まへ中ちゆう致ち見けんせせ善ぜん惡あく心しん道どう中ちゆう迷まよ所ところ一ひと覽らん故こ人にん一ひと筆ふで筆ふで

大人の著述して大ひは行也既に數編及ぶ
志は類次の小冊と予也綴よと書肆にあつて也
素より奴婢乃出代時より寸雇の老婆番たる豆腐
取と来り酒屋へ走れ土用見舞や歳暮の仗ひ
町飛脚これれなきほど何でも角で七十九文也
安清合にうけ返も諺如く法く孫人と墮行駒
の駄賃は濁るゝらぬ持おの愚文は直毫は立場

と板問屋の口付に調も構は唯孔方舟走る徒然
されむ禍福明あ一人の招く所小来る小子文婦人
頼む処或いある寺貪福吉凶喜怒哀樂人間萬事
催足乃せ先と便るを輕ひめと六塵はらへる中々
故事法はせと先師の出売故人乃糟粕と煮て
これハ下にはらうと法障見らる不味所ハ地所の質
一月賓客へる早し兼る色欲此其さむる

故より誤字をくどくどとちやほほ是れ用か小刀
細工戯言作りの課のいのいらざる世話の教訓
振大道好は氣根をねるゝと行をふまゝ
乃紙おし由る夏いと長く

時嘉永二酉歳申夏水無月製本と作者の櫛を店
賞て桶町乃小後以紙圍會の大方燈と窓の身そ

樂亭西馬述



夫善惡の差別ハ既ハ教編に著一われハ唯二と愛小説多
善と惡と雲泥のたがひあるも別よむづき夏にのん
只二道ありて即座ハ大惡も善人と形ありそハ道理と交
我終と捨法度に背るぬゆる中と烟夕心掛とハ善小至るとり
外あり人生れとハ白き糸此如く二葉の木芽ふりてく
曲るとも曲ることも又ち何色ある滯るあられハ生長に障
親の志のほう方ひよく教えさそきおのづから若たふいそ
旭此二枝鳥の及南太の善宮あまるとハ皆自然此ひ
あれども接の狂言山陵なる乃飛云そしあかく教ゆをそ

夫之... 之... 其... 行... 如... 其... 亦...
(Handwritten text with extensive annotations)

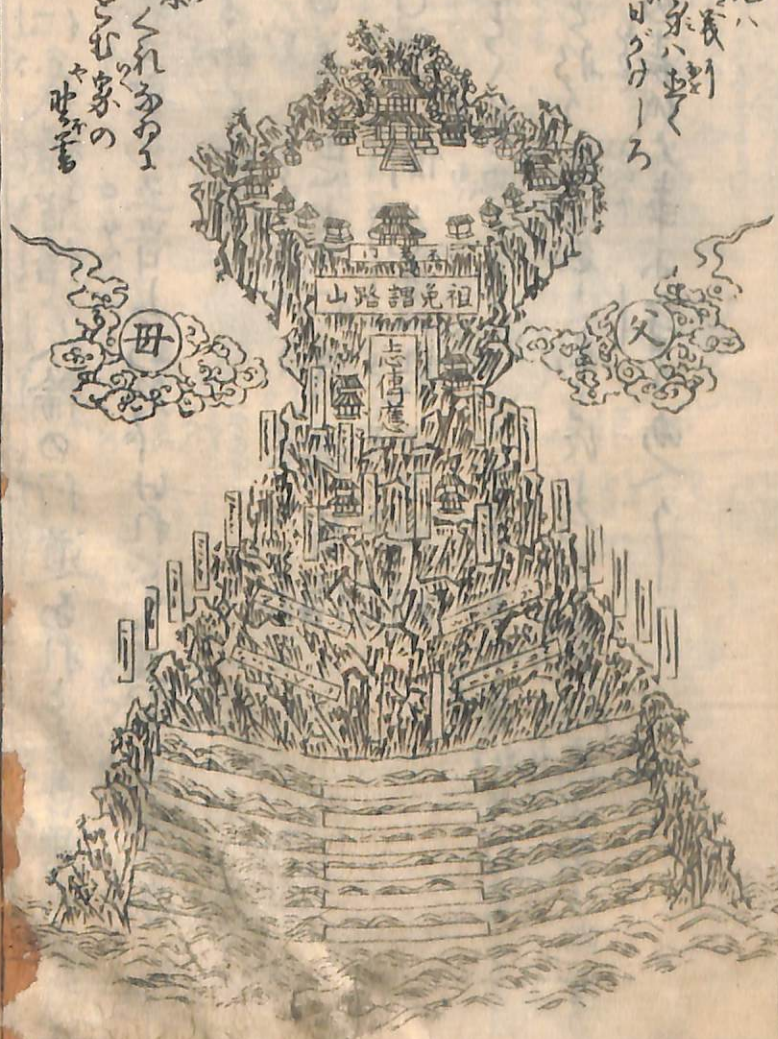
神... 金... 三... 德... 皆... 之... 德... 道... 亦...
(Handwritten text with extensive annotations)

長命延壽

二本

これ等の
世の
世の

自他ハ
皆衆ハ
世の
世の



衆身善之圖

罪不作

二本

番頭衆別家五百兩

且衆小遣百兩

妻衆持系 二言高

僕従 十人 千兩

此皆命限等々も高様我侯以捨ざる故ふあがど
 時の法度ハ夫々く段々下々も觸れざる者一人の形く千里
 果々もゆるり届くも

忠孝仁義禮智信、人輪の行道あれども善悪小はまを、
 啓云、此文字の五音とあはれぐれども其天地ある度決り
 画ぐる如くあり

○善 忠孝仁義禮智信

○悪 偷乞盡妓零耻針

斯のどく善悪心をも殺つてせまくその裏かえはたつりふ
 善人とつり悪業とあらはらうと表は悪ふあはぬや
 皆さう表紙大事お守りあり

愚
 ちんじんてんかつてんせど
 のりめんおのりめん
 おんじんおんじん
 まつたすてかたさ
 ときさつ日本のおり



偷
 のりめんおのりめん
 おんじんおんじん
 まつたすてかたさ
 ときさつ日本のおり



茶

ちんじんてんかつてんせど
 のりめんおのりめん
 おんじんおんじん
 まつたすてかたさ
 ときさつ日本のおり

乞

ちんじんてんかつてんせど
 のりめんおのりめん
 おんじんおんじん
 まつたすてかたさ
 ときさつ日本のおり



心こころに小佛せうぶつの道みち不ふ討うちひあむねらばこそも神かみやちんんん古ふるく
 上うへり誰たれもひ偽いつはりえさる事ことあねれども我人われびとをたせらるゝ死しれ
 神かみどのもて者もの不ふ信しん心のくせま何なんの意いはひの思おもくが勝かちをある
 色いろ欲よく妄やう言げんとあへくそ銘なづく好よく神佛かみぶつへ無む理りを預かひも意いれ智ち
 意いと佛ぶつ牙がが原はらの親王おやぎみす八はち分の御ご以もへ系まりてこりやく
 ちやくトさぬぐの預かひひつと折をりささあぐ錢湯せんとうの流ながる小娘せうにやう子こ
 供どもの落おち合あはるが如ごとく長局ながきよ小部せうぶを方かため見負みお論ろんに即すなはち
 ころへ成田なりたの不ふ動どうさぬがらちあがふとらえこりこにハ堀ほりの内うち
 さぬいよはしハ大西おほにしの系けいあかこ水天すいてんえさあトさひくの浮氣うき信しん

心こころあつよのしころちあもたぬち勝かちをを預かひつるゝあ神かみも
 仏ぶつもあまされあんどささるゝ萬民まんみんと救きうひあふ慈雲じうん毛麟もうりんのひあ
 悪人あくにんに心こころあ大志おほしあつげ只思ただおもふは救きうひあひささるゝ物もの惣そう救きう王おう
 の金龍山きんりゆうざんへ山やまを渡わたりあむに毎日まいにちく救きう万人ばんにんの預かををのりく
 世よ俗ぞくくくものまらぬ故ゆゑあゆこの乳ちち乳ちち帳ちやう面めんに作つく合あ竜山りゆうざん乃なり
 お堂おどうあ集あまり夫おとこくの洋やう氏しあま直ただなるが何なんをも佛ぶつを存ぞんある預かを
 取とれども多おほくハ色いろ欲よくの二ふたを帳ちやう面めんふは山やまあればハ山やまを渡わたりあむ
 知ちあつるゝ事ことあむそ死しまると救きうひあふが推おしまひむれハ大おほいひれ
 心こころ押おしくあてまらハあふあさるゝも心こころ救きうあめめめ因いん果が

蘇前 文又 禮法 毎日 備人の 操り 申す
天子 國事 之 意 女子 其 儀 亦 之 意 申す 日
祇園 會の 神興 之 興 不 明 之 意 法 後 禮 之 意 申す
之 儀 亦 之 意 申す 儀 之 意 申す 今 年 是 非 之 意 申す
前 之 意 申す 之 下 筆 操 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す
之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す
之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す
他 念 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す
之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す

高 礼 婦 之 儀 亦 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す
小 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す
之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す
天子 之 祖 影 有 神 輿 城 之 不 空 下 郎 之 身 分 之 意 申す
之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す
之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す
ト 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す
之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す
之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す 之 意 申す

即時に罰と爲る由え小堂院にて人小麻呂已も怪我
とあり又思はば押打且即死あどはありあまらば
つく守りあぶ人世の場もははぬるのれどもあま
心小忘れごとて夏を行へむさはらのちまちも有まはれ
十二銅の賽物で千両の清原とらうこれ投けて百五
無々城常りたきを欲の性合で六一年の秋情形
大星の言葉のどく青海苔世々礼またと神乐打より
も控空形り
叔預と掛らう神仏さあも毎日数万は人あまらば一人く小

其空を聞解がく仍くお続の上同く申を我とてあふ
夢相よ告はあひ又ハ御園城を知らぬ小中ハ頼重と
形く遊山半分はく諸るもあまらうけ且て先諸人の氣は
移る見世物よはちえと説聞をありとあり
年く歳と向ふ島の花合似る年々く世々の人
同くうは大海へ流る隅田川の流は絶きとてあま
元乃あまのちも昨日ハ飛鳥今今日も日暮と月日
送るち光陰の矢隙は駒は足踏くも止る事形り
されば一時片時もあまらうと暮さぬあれもあまらう

大海の如く我侯の鼻はさしは修る狩人漢臣の志す

よりもその増進す志は尊の上の安きに居る一本侯のあや

めまを志す利秋は速にかえつて元々の細致諸をのり

身代の腰は骨の新徒捷ひて我を志す擲干より唐を

小情むぐ一是ら商人の心ゆきと一あふおる

堀の角の祖師浄鏡法の氣はうはく宮ふとある所ふ人の欲う

親仁のししが年七十執る一人も子供多く唯明く是を欲う

急想言乃と施さるる一或日所持の土藏よりうと日汝も表向

ハ丈夫小見ぬれものも我造りてより三十余年は星世お

修むは志せんと梁柱の朽と老く思ふ多し候て我故と根柱の候

僕せんと思ふも是まは多き物入るは只のれはゆと獲くありと

むむけに云ふ其叔親仁は愛ふ土藏乃精頭かくいひる我く

永くは恩とも思ふ人於今日の如く日進てが甚くと憐れとあふ

係あら我く又あふ孫のむ年若れと肉の土蔵骨は志と身

取ま命の梁柱危く見えせあを切支秋き想ひむあり

土蔵の志は根つぎもあふ人間の命はを信ひもあ

がう生年百ふみ候常なるも我れ終を以てくはあま孫

の時をたりといふと思えは後よまはり業後にお孫の候ひ

あまの事も業の仇討一巻の心は女房の身代
奪入其身に成る君の道にまよふ且君氣の認り主
己の性産成りおるまの平家仇討武士の身代場新
柳も極ま其上王の道事定指合は是又大膽不敵
言無國難も是其地道下り自復一切是此
分事年天の賞得時一多の事水の事無事
天不守り之に之罰之妙一極情也
唐語少自長船水も多し船空水之舟之巻
と心算の解織也一極情も主之文の事一進進之也

自心空も水産之も其の事其の事之の目も看
風の時時の時時時時時時時時時時時時
中不空の時時時時時時時時時時時時時
然言記平家道の時時時時時時時時時時
も不空の時時時時時時時時時時時時時
心産成り成る之取用之也一舟も空之も事
の善の悪の事又方天の氣の上も其の事其の事
我自心空の時時時時時時時時時時時時
上も空の時時時時時時時時時時時時時

急角一がふをらんともるとままちりり心の暖く考へ堪忍は
帆坂巻と胸の礎とあらそが肝要なり
世の上の人仏神と伝むるふちひある終り支一神佛と伝むる
夫はねぐ我身の行ひとよし善哉善根に潔白に心取
持神仏の教ふ時ふやうは身と持と相信せ其何ぞ利血
形もんや後ふ以如くせのあいつの神とまははく名聞利
欲のたを神仏と称して交へて清めたるなり依と善ふ心と
とせ行ふ時と盛初まるとも神仏守りある心と神のた
叶ひぬ祈らばととも神やさうんけいふとて希へ知る庵一

人々の身不懐一むごまへ色欲なり聖人も仏もあまを
茅一掃ちぬ法よく古くを考ふる唐土周の幽王が褒姒
玄宗は揚貴妃をとりあひ人の國を傾け城を破りすのぼて
のそえがに破をむ女を男に命取らる谷多身とく鈕取り
東坡先生の白男女の淫樂ハ喚き聲を抱多美人といふわ
下皮むけハ下見苦き白骨取りと思ふべ一
夫婦とあふ前生はくくくく深き因縁あり災目よき女
愚ある不男坂丈夫持堅き優男醜き女と妻ふりりも皆
持まの縁つくられを白眉故事に出る月下老人と





金の番人

敵と父

其の以てそのありて妻の中におき徳とて其徳城の男女
の足に結ぶ所と云ふに里を隔とも巡り連く終小支拂也
形るといへり故小支拂比極と仁糸の傍といひる積幽怪録
又書言故夏母もてくう月下老人俗小以結ぶの神形
されば支拂とありよくあき極とてと睡まぐともまきりに
あそびんとく利欲より甚守とてまま一さじ世俗の積小
も金か歌といへり金銀の人と害するまありりりりり
欲欲から死金を積まぬるとも死する時八皆至之行終あり
いへり死する者金銀と持てゆんや身不應せむ天理に叶はる

富貴と祈ふ大の形と云ふ之は只まくの家業と大切小勤
親兄弟と事と能と凍えたる程の形へり外に欲とわくを
くく一生と金銀と持てかえりて昔と怨と人(後)思ある
形りり程留まふる逆も浮世のそ形く危あまの世は上の座を
が如く云義ありて且満るハ我れもそくく云の如く古人もいへり
世の危むいふも雲はどり今日本もそありとも明只そりり
と知りて不義の金湯銭金とてく次
二百三十六地獄と云皆我にやう生れ我にやうの深淵羅王
俱將神牛頭牛頭阿防羅刹鉤の山二途の火は車返はく

何ぞ我と我心の地獄へ落ちたるの悔まりまきまきと云や大華形
 唯心あり万代不易乃其基と云や親の心は慈愛の心親子孝悌
 尽すまき妻と懐くも又夫婦は又身と道と身と道と夫と妻と
 家来と主と又も人忠誠は明と交り有るまき入道と志
 形と勤む時分自他と密に和熟して親と懐くまき能治るあり
 是皆まきの身の行ひふするあり神佛佛言は教法を以て道と
 實の徳徳と授けんと思ふけ徳を初々心ありまき徳を徳
 蒙る福とく自益あり
 世道と徳一因とんと思ふ銀の匣に日本書と云項恩堂本及助子松の
 佛高札之字といへる書と如く入心りともありあか



御免 御高札之寫

半紙本 中形本 全一冊

主従日用條目付リ火之用慎 各一冊

く日用のむねを平らるる
 ありありと書かれり
 古より名るる勇士の徳
 ありありと書かれり
 心ざかりるる画本なり

溪齋英泉翁筆

繪本英勇鏡 全二冊

哥川國直筆

繪本武者袋 全一冊

かみどりありむきの画本なり
 一とて流を曲るるお歌なり
 画本なり

諸職 必用 紋切形 溪齋英泉輯

りくらの紋をきくまきなり
 うさぎありては職あり
 小行きて平堂のなり

山田常典大人校

百人一首女訓抄 全一冊

川上色紙振冊の流方あり
 且、易の書味なりわのなり
 著女子の使たるる画本なり

人間生 一筆并主人作

善惡道中記 全一冊

人間一生の如く道中記の如く後を記す

善惡道中記第二編 一作四画

迷所圖會 全一冊

善惡道中記の如く迷所の如く

同第三編 一作國芳画

同 迷所一覽 全一冊

迷所の如く迷所一覽の如く

同第四編 一作貞秀画

貧福悟道捷徑 全一冊

貧福悟道の如く捷徑の如く

同第五編 西馬作國輝画

善惡色欲二道 全一冊

善惡色欲の如く二道の如く

同 六編七編

追々 全一冊

追々の如く六編七編の如く

相撲 改正金剛傳

立川馬馬作全 當時現在の力士と馬馬の如く

力競 表裏 相撲取組圖會

一作全一冊

力士の如く相撲の如く

實語教童子教餘師

全一冊

實語の如く教童子の如く

增補 繪本實語教童子教餘師

繪本の如く實語の如く

畧画 立齋戲筆 淨瑠璃圖會

立齋の如く淨瑠璃の如く

嘉永四年 亥年正月再刻

京橋銀座四丁目

東都書肆

頂恩堂

木屋又助梓

